緑ネット通信 No.19

緑のネットワーク・まつど
代　表：　鈴木　護　　年会費：1000 円
連絡先　　渋谷孝子　047-348-7977
TEL&FAX　　高橋盛男　047-367-2857

観察学習会⑲
「千駄堀＊森の小径観察とクリーンアップ」

藤田　隆

１１月１１日、前日に終日降り続いた雨が、時折思い出したようにぱらつく空模様の中八柱駅に集合したのはなじみの顔も混じって１３名（途中一人合流し１４名）。千駄堀・森の小径に向かって出発した。県道を渡り、八景台の駐車場で千駄堀の全体を見渡した。目の前には戸建て住宅が広がり、「２１世紀の森」に接して千駄堀の森がかろうじて残されている。畑の一部から縄文式土器のかけらが今でも見つかり、この土地の歴史の古さを知ることができる。森では生き物観察も楽しめる地区である。森が深いため、家庭ごみ、電気製品、家具などの粗大ゴミが投棄されたままになっている。クリーンデーの清掃で粗大ゴミを一掃するのだが、なお、ゴミの投棄はやまない悩みを抱えている。今回は森の小径を観察し、４回目となったクリーンアップを行うプログラムである。

松戸六中に向かう道を北に折れ、道幅の狭い住宅地を抜け、標高にして５メートルほど上ると「新山子どもの広場」に差し掛かった。腹部が婚姻色に染まる巨大なジョロウグモと３枚張られたアミをしばらく観察した。切り通しの部分でトタテグモを発見した。この種のクモはアミを張らず、虫が近づくと扉を開けて捕

獲する性質を持っている。扉部分は片開きなのでキシノウエトタテグモである。両開きの扉を作るのはカネコトタテグモで、この日はあいにく両開きとは会えなかった。土を利用した扉は見分けがつきにくく、見つけようと必死になる姿もあり、トタテグモの観察は大いに盛り上がった。

道が谷へ下りはじめると、ゴミが少しずつ目立ち始めた。投げ捨て防止と思われるネット、波形トタンが道路と所有地を仕切っている。トタン板の内側は投棄するゴミを隠してしまうため周囲のネット張りの部分に比べて数倍多く悲惨な状態になっていた。２週間前にクリーンデーでゴミを一掃したと思われる場所もあり土地の所有者によって対応が違うように感じた。

今回も千駄堀町会の協力をいただき、一時間ほどゴミを拾った。集積場所に集まったのは表の通り。

表　収集したゴミ

燃えるゴミ	９袋	電化製品	
缶類	２袋	テレビ	２台
ビン類	１袋	ファンヒーター	１台
ビニールゴミ	１７袋	ファックス	１台
ペンキ缶類	１袋	ゲーム機	１台
		加湿器	１台
		ガスレンジ	１台
		洗濯機	１台
家具・家庭用品類		粗大ゴミ	
ベッド	１台	タイヤ	２本
ソファー	１つ	化粧版のドア	１枚
ソファーマット	１つ	鉄くず	５本
薄掛け布団	１枚	ゴルフバッグ	１つ
クッション	３つ	ブルーシート	１枚
瀬戸物	４枚	自転車	３台
かさ	７本	自転車部品	４本

集積場所から千駄堀集会所へ向かう途中、ヌスビトハギ、オオヌスビトハギを観察し、ホコリタケ群落に出会った。別名キツネノチャブクロ、上部に穴があり、本体をぽんぽんとたたくと胞子が煙のように湧き上がり楽しいキノコである。小学生の頃に山中でこれを見つけ、煙の出なくなるまでホコリを出して遊んだ記憶が蘇った。懐かしい記憶の引き出しを開けてくれたのは森の小径と生き物たちだった。

集会所では、ゴミ対策を行っている「立切の森」の報

告があった。森に接する住宅の住民が森の立ち木を数本伐採、地主さんが驚いたという事例があり、森の保全活動に携わるボランティアと地主さんの間で起きる課題が浮き彫りになった。不法投棄対策にはゴミを隠せないように下草刈りを進め、手入れしていることが分かる工夫をしている。とのことであった。

ボランティアが所有地内に入るための了解を地主さんから取れないこともあり、森の活動が一律ではないことがはっきりとしてくる。都市の緑を保全する活動の複雑さを垣間見た思いだった。

特集　**森と活動の紹介**

一足冬を越えて

三樹の会　新庄美公

金ヶ作自然公園の前にたちパラマウント映画の３６ミリフィルムのような立切の森から目を写し、三吉の森を眺めると天空の蒼にみどりのじゅうたんを引きつめた、そんな気にさせてくれる、自然と空気がうまく鼻開き、歩幅が広がり早足になる。

取り留めのない自然が我々をいつも迎えてくれる、一茶も「しぐるるや煙草法度の小金原」と詠っています。（市立図書館発行「松戸の文学史」から）

これらの森の歴史をちょっとながめてみよう。

下総台地一帯には古くから牧場があり金ヶ作あたりは「小金牧」と呼ばれていました。馬の放牧や八代将軍吉宗を始めとして、３人の将軍が４回にわたって盛大に鹿狩を行ったことで有名です。

立ち切りの森の活動は月２回第一土曜日、第三月曜日です。

春は其の森からしか見えない素晴らしい景色にであえることからはじまります。

森に向かい一番右人家との境に森の凄惨さがかもし出された一面に遭遇東の住居との狭間に置かれた杉の木が無残に切り倒されている。

土地を造成する業者が地権者に黙って伐採か？其の姿を右に見てからだ を左に向けた方向に思わず目をひかれた。そこにはしだれ桃がピンク、白、赤と色とりどり森の緑のカーテンを大きく従え見る人の心にささやきかけるそんな景色は訪れた人の特権です。

さらに足元をふと見るとあちらこちらに春欄の花盛り小さいがワイドな森がいつも我々に元気の源をさずけてくれ有難うといいたい。木々の調査はビニールテープで割り振りを決めたのでおいおい進める予定。何よりもゴミ片付けが効を奏したのか近隣の住民がねぎらいの声をかけてくれるようになり、今まで程はゴミのポイ捨ては少なくなりつつある。足早に三吉へ向かう目に入るのはみどりのカーテン、孟宗竹の季節に変わらぬ猛々しさがよく来たなと迎えてくれる、雨の日などに一人たたずむと、枝に落ちた雨しずくがまるで「雨音はショパンの調べ」（どこかで聞いたようなと感じるのは私ひとりか‥‥其の正面にたたずむのは樹齢数十年いや三桁か‥‥椎の木、まるで戦国武者を想像させる其の姿、供にもみじ等従えて・・・

そんな森に足を踏み入れると竜の髭の散歩道がある、少し歩いてみよう。

ケヤキの大木、無患子（なんと読むのだ）そんな木もある、藪椿、シラカシ、お茶の木、etc

何気なく足元を眺めるとあっ‥‥エビネがある。若竹も遠慮してかそこをよけている。

先人の樹木調査していただいた渋谷さん、馬場さんの顔が浮かぶ。活動日は第四月曜日です。

短歌俳句も好きな仲間が作った句がある紹介したい。三樹の会のマドンナ小島さん

新樹光 第二の青春ほころびし
三吉の森 梅雨雲ぬけて　笑顔なり

一人一人の個性を受け入れてくれ、温かく包む森森の工（耕）作人とでも呼びたいような仲間が集うそんな会が「三樹の会」です。

樹林地整備活動でのゴミ回収について

私有地で収集したゴミは基本的には個人が決められた所に分別して出す事になっています。従ってこれまでは、ボランティアグループが活動中に集めたゴミは、それぞれのグループが持ち帰り個別に処理、粗大ゴミなどは地権者さんや行政に相談して回収をお願いしていました。しかし、昨年緑のネットワーク・まつどの定例会でボランティアグループが収集したゴミの回収について決議、「みどりと花の課」のご協力により金ヶ作地区（八ヶ崎の森、小金原ホダシの森、囲い山の森、立切の森、金ヶ作の森、三吉の森）でそれぞれが収集したゴミをまとめて年２回決めた日に回収する事になりました。

１回目は７月、２回目は１２月１０日に年末分として回収していただきました。これによりボランティアグループが活動している森の地権者さんのご負担も軽減、行政への依頼もスムーズになりグループの清掃活動も計画的に行える様になりました。

（『三樹の会』山下　正徳）

No.	グループ名称／代表	活動場所／TEL	活動日／アドレス			
1	緑のネットワーク・まつど	観察学習会：年４回、定例会：第２土曜日 17 時～（於 テント小屋）				
	代表：鈴木　護	342-8509	mamoru@fujipacific.co.jp			
2	松戸里やま応援団	八ヶ崎の森	八ヶ崎	第２水曜日	第４水曜日	
	代表：高木喜久雄	368-1272	（高木　o2wanobenri8_sato8maouendan@docomo.ne.jp）			
3	囲いやま森の会	囲いやまの森	金ヶ作	第１土曜日	第３火曜日	
	代表：野口　功	345-6086	n-gera02@ktd.biglobe.ne.jp			
4	三樹の会　サンキノカイ	三吉の森、立切の森	金ヶ作	第２土曜日	第３月曜日	第４月曜日
	代表：早川　勝	387-7982	http://www.geocities.jp/matudosatoyama hayama59045@joy.ocn.ne.jp			
5	四季の会　ヨンキノカイ	ホダシの森	小金原隣接	第１土曜日	第３土曜日	
	代表：中島敏夫	364-4547	toshio-na@k8.dion.ne.jp			
6	金ヶ作の森を育む会	金ヶ作の森	金ヶ作	第２土曜日		
	代表：高橋盛男	367-2857	forest-t@w2.dion.ne.jp			
7	関さんの森を育む会	関さんの森	幸谷	第３日曜日		
	代表：関　美智子	341-0327	（山田　junnen@mb.infoweb.ne.jp）			
8	溜ノ上レディース	溜ノ上の森	幸谷	第２木曜日	第４金曜日	
	代表：渋谷孝子	348-7977	peco@ka1.koalanet.ne.jp			
9	根っ子の会	根木内歴史公園	根木内	第１金曜日	第３金曜日	
	代表：森　恭二	342-4798	http://negiuchi.hp.infoseek.co.jp kyoji@wing.ocn.ne.jp			
10	わんぱくの森の会	わんぱくの森（市川市）	市川市大町	第１木曜日	第３土曜日	
	代表：深野靖明	388-0200	kattejin@koalanet.ne.jp			
11	大町教育の森の会	大町教育の森（市川市）	市川市大町	第3木曜日		
	代表：大河内英夫	047-338-3148	okochi.hd@w8.dion.ne.jp			
12	千駄堀を守る会	21世紀の森と広場	千駄堀	第4日曜日		
	代表：山田純稔	346-2878	junnen@mb.infoweb.ne.jp			
	まちづくり交流室テント小屋		http://tento-goya.org			
	代表：榎本孝芳	308-5200	tento@ka4.koalanet.ne.jp			

関連グループの活動日等を一覧表にしました。

意欲満々

里やまボランティア入門講座 2007

野口 功

2003 年に始まった里やまボランティア入門講座は、今回で五期目。3 年ぶりに募集定員を超える 21 名の受講生を迎え、活発に行なわれました。

参加者は、20 代の学生から 70 過ぎまで広い年代にわたり、男女ほぼ同数。初めて樹木にかかわる人の他、すでに豊富な経験や専門的知識を持つ人や、はじめから里やまボランティア活動を志している人など、多彩な顔ぶれが集まりました。

講座の中味は、ほぼ例年の課程を引き継いでいますが、今回は、新たに「里やま整備の進め方」「里やまボランティア団体に聞く」が加わり、盛りだくさんな日程となりました。二回のグループワーク「この森で、私はこんなことがしたい」「はじめの一歩を考えよう」は、活発な意見交換が展開され、ハイレベルの発表がありました。

年末に行なわれた講座終了後の交流会では、もう役員体制が決まり、これまでにない早い出足となっており、これからの活動が楽しみです。

以下、受講生の感想から

- 五日間、人間同士の交流も図られ有意義だった
- 若い人から年配者まで、皆さんと接触でき、大変有意義だった
- 年齢の違いを超えてのグループワークは、違う意見や見方も多発し、参考になった。緑に対する思いが異なっていることを再認識した
- 単なる講義でない点、よく準備されていた
- 話を聞くだけでなく、一緒に歩いたり、木を切ったり、食べたりで、親近感を持ててよかった
- フィールドがあるという点で、学校の机の上で習うより、身にしみてわかった
- 初心者で大丈夫かと思っていたが、手厚いサポートで楽しく学べた
- 活動の本音や実体験が聞けて、手作り感のある考え込まれたプログラムで、毎回楽しめた
- 自分の住む街の緑の現状が、現場実習もあり、理解できた
- 何も知らずに受講したが、市街地の緑の維持・保全が大変厳しいことがわかり、今後の生活の中で何かお手伝いできればと感じた
- 今までに出会ったことがない内容なので、少し難しかった（同様の感想が数人）
- 「早く活動したい」「皆さんと一緒にボランティア活動ができたら～」「とりあえずできることから始めましょう」「森林の維持活動を手伝いながら考えたい」「秋もとってもよかったが、このメンバーと冬・春・夏と自然の中で楽しめたらいいな」

～しぜんのコラム①～

トタテグモの扉探し

11 月の千駄堀クリーンアップ&観察会では、森の小径でトタテグモの巣穴を見つけた。トタテグモは地面に穴を堀り、その入口に扉をつけ、扉の前を徘徊する昆虫などを捕獲する原始的なクモ。昆虫が進化して飛ぶようになり、空中に網を張るクモが現れる以前から生きている。

千駄堀で見つけたトタテグモは、正確にはキシノウエトタテグモ。環境省のレッドリストには「準絶滅危惧」、千葉県では「重要保護生物」となっている。多くのクモは糸を飛行手段に使って広く分散するが、トタテグモ類は歩いて移動するだけなので、分散範囲が狭い。土地の改変が激しい今日、何億年も前から命をつないでいるトタテグモにとっては、暮らしにくい時代になっている。（山田 純稔）

トタテグモの巣穴…扉は周囲と同化していて見つけにくい。昔からある土の斜面で、雨水がかかりにくいところを探してみよう。

○次回　緑ネットの観察学習会は…　**2月10日　里やまシンポジウム**（チラシ参照）

樹林をそのまま残したいと考えている地権者のナマの声を聞いて、私達に何ができるか、一緒に考えましょう。

○市民に活用され、今後エコミュージアムとして期待される「関さんの森」関連の同封チラシもご覧ください。

緑ネット通信 No.20

緑のネットワーク・まつど
代　表：　鈴木　護　　年会費：1000 円
連絡先　　渋谷孝子　047-348-7977
TEL&FAX　　高橋盛男　047-367-2857

「里やまボランティア入門講座 2006」での地権者さんとの交流から話が持ち上がったシンポジウムが、緑のネットワーク・まつど、松戸市みどりと花の課、松戸まちづくり交流室テント小屋の共催で、東葛地域全体の問題として近隣の市にも呼びかけ、2月10日（日）に行われた。

当会でははじめてのシンポジウム開催とあって、準備や進行など不慣れなことも多かったが、運営スタッフの頑張りで大盛況のうちに終了した。

東葛里やまシンポジウム
「所有者と語ろう 都市の樹林は残せるか？」

報告:藤田　隆

【事前の準備】

松戸里やまグループ、東葛地域の里やまグループ、東葛地域の自治体に呼びかけ、参加者を募ったところ、参加表明が１１７名あり、会場は８割方埋まるとの予想で当日を迎えた。

当日準備は午前１０時３０分からテーブル・いすの配置、パソコン、プロジェクターの設置、パネル展示を１１時３０分までに終了した。１３時過ぎたころから参加者の会場入りが始まった。開始５分前には受付に列ができるほどで、１５０名のキャパシティいっぱいになった。

【プログラム】

13：30 開会　司会：野口功
　　開会の挨拶　高木喜久雄
　　（松戸里やま応援団代表）
　　シンポジウム予定（時間配分）説明
13：40 基調講演
　「里やまとともに暮らす緑園都市をつくろう」
　千葉大学大学院園芸研究科教授　田代順孝氏
14：30 休憩（20 分）
　展示の概要説明、映像
　DVD の紹介　渋谷孝子
14：50
　パネルディスカッション
　「都市の緑、その魅力と価値をどう伝えるか」
　コーディネーター：高橋盛男氏
　パネリスト：
　　吉野寅二郎氏　松戸ふるさと森の会　会長
　　竹内一雄氏　市川みどり会　会長
　　伊藤　守氏　かしわ里山の会　会長
　　深野靖明氏　松戸里やま応援団
　　田代順孝氏　千葉大学大学院園芸研究科教授
16：30　閉会

千葉大　田代教授

【シンポジウム開催】

１３時３０分、緑のネットワーク・まつどの野口功氏が開会を告げた。松戸里やま応援団の高木喜久雄氏が挨拶し、千葉大学大学院田代順孝教授の基調講演が始まった。

田代教授の講演は「里山と暮らす緑園都市をつくろう」のテーマで、緑地学研究の系譜から都市化と緑の変遷、そして緑園都市構想についての話があった。

松戸市など首都に近接した都市では、高度成長期による大規模な宅地開発が一段落した今、パッチワークのように残された里やま、里地の管理が必要とされるようになり、暮らしと近隣の緑との関係に市民の目が行くようになった。緑地は共通の社会資本として再確認されるようになった。緑園都市構想は核となる緑地を中心に多様な緑地をつなぎ合わせ、生活圏を緑で彩るイメージだが、その実現には行政、市民グループ、地権者が協働し、プロモートする仕組みが必要だという。緑園都市のマネージメントには、ＮＰＯ法人とは別の「緑園都市会社」とでもいうような事業体が必要なのではないかと結んだ。

続いて「都市の緑、その魅力と価値をどう伝えるか」のテーマでパネルディスカッションが行われた。

コーディネーター
高橋盛男氏

三市の森林所有者から樹林の状態と困っていることなどを聞いた後、里やまボランティアからは樹林の保全と現状の報告があった。さらに、行政、所有者、ボランティアが築くネットワークの中で、樹林地をいかに保全していくかが話し合われた。

柏市、松戸市の山林所有者から、樹林地に近接して建てられた住宅から、「日陰になる、風が通らない、枯葉が邪魔、枝が折れて屋根にかかっている」と苦情がある。そのたびに対応しているが、十分ではない。所有者の高齢化が進み、亡くなると相続税の問題が発生し、物納を余儀なくされる。そのたびに緑が少なくなるといった現状は首都圏の近郊都市が抱える共通の問題がそのまま表れたかたちである。一方、市川市では樹林地の相続の問題が起きると、市が買い取ったり、借地したりしてきたという経緯がある。今は山林所有者は「里山再生事業」を行って、樹林地を保全しているが、なかなか進まないといった話があった。

松戸里やま応援団の深野氏は松戸の樹林地について、保全活動している以外に何十年も手が入れられなくなってゴミ捨て場と化している樹林地がある。市内全域を見ると、里やまボランティアの活動はどれほど樹林地保全の役割を果たしているのかと述べた。

行政の立場から、松戸市では平成１５年から毎年「里やまボランティア講座」を開き、樹林地保全のボランティアを養成している。それまでゴミ捨て場になっていた緑の空間がボランティアの働きで一掃され、地域の宝物になっていくさまを感じている。行政としては緑の保全に市民が参加する推進力に期待している。

市川市では「緑と花の市民大学」を開いている。森林所有者の市川みどり会では里山再生事業を進めている。ボランティアには、小さな目標を掲げて、楽しみを見つける活動をお願いしている。

柏市では、ゴミの清掃、落ち葉、日陰を作る枝を剪定するなど、ボランティアが樹林地の保全をしている。持続のために、安全に気をつけて、ゆっくり、楽しんでもらうことをお願いしている。市民全体が里やまは素晴らしいという認識を持つことで相続の問題にもつながると考えている。

３市の山林所有者の会は、霞ヶ関（国の省庁が集まっている）に出向き、相続税の猶予などの陳情をしている。都市の緑地と地方の緑地では、その役割が違うことなどを訴え、法改正に結びつくような提案をしている。

田代教授から、東葛地域のみどりのネットワークが緑地の保全に対して力をつけてくると、首都圏を巻き込んだみどりのネットワークに発展するのではないかと期待を込めたコメントがあった。欠けていると思われるのは市民、行政、地権者の相互の話し合いだろう。場は開かれたものでなければならないとまとめた。

市川みどり会の竹内氏は今回のセミナーをきっかけに、持ち回りで緑の保全について話し合いを継続していきたいと結んだ。

【懇親会】

会場を変えて交流懇親会を行った。参加者５０名。パネルディスカッションのパネラーが全員出席し、シンポジウムで言い尽くせなかったこと、フィールドを持つグループは東葛地区の他のグループとの交流、行政との情報交換をした。

アンケートより

○緑の認識の共有と拡大：啓蒙活動が必要。緑の共用：地権者の願いと市民の負担・活用には解決できる切り口があるように思う。緑を残すために：地域の緑保全や相続税とかの広域・政治力という角度で真剣に取り組んで欲しい。○ベネフィットに関する議論を進めていくべきです。○田代先生のお話しをもっとゆっくり聞きたい。○森林所有者の生の話しを聞けて非常に面白かった。諸問題の解決策のキーワードは、社会貢献では？○相続税のことを解決しなければ森はどんどん失われていく。○父は畑や林を守りたいが、税金が高すぎる。知恵を貸して！○森（緑）の大切さの底辺づくりをすすめる、小学生などを対象として自然体験教育の推進が必要○緑の保存に興味をもつ子どもたち（若い人）を増やすことが必要。○このようなシンポジウムの継続開催に繋がることを期待する。○ボランティア作業に協力したい。（市川、柏、松戸）

次の１歩はどこから？

高橋盛男

予想をはるかに超える参加者に、関係者一同、おどろきももの き感謝感激でありました。会場で実施したアンケートの結果も中身が濃く「今後、このようなイ

ベントがあれば参加する」「企画運営に協力できる」という人がそれぞれ９割にのぼりました。

これをただ１回のイベントで終わらせてはもったいない。「どーする？」という話がさっそく出ています。

「東葛」と銘打ったからには、やはり東葛地域で緑に関心のある人たちのネットワークをつくっていきたいですね。アンケートにちりばめられたキーワードをもとに、不定期でも連続した学習会を催していける態勢づくりをしようということで、これから準備をはじめます。お手伝いくださる方は、ぜひご連絡ください。

連絡先：forest-t@w2.dion.ne.jp（高橋）

特集　森と活動の紹介

四季（よんき）の会（仮）

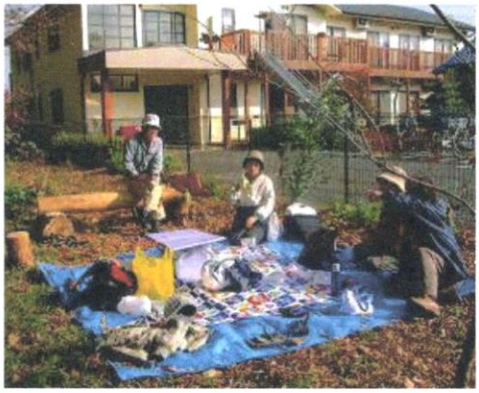
四季の会代表　中島敏夫

四季の会のご紹介をさせて頂きます。

当初１７名で発足した会ですが、講座受講生の中の学生さんは、学業半ばで、活動に参加して頂くのは無理があり、現在は賛助会員という立場で応援をしていただいています。現役の若い女性も森の素晴らしさは理解されていますが、実際の活動日は仕事と重なったりして無理があります。新年度から新たに女性三人の加入者があり、日常的に活動している七名の仲間と共に、十名の活動要員を得て、活動を楽しみながら、励んで参ります。

活動場所は、金ケ作と小金原の境に位置するホダシ内と言う場所で、“ホダシの森”と命名した、2.65km^{2}の極狭い森です。

千葉県森林研究センターで、森の持つ身体への癒し効果を、実証的に研究されている総谷さんの話では、その効果について、決して森の大小ではなく、いかに良く手入れをされているか、如何に安全で、安心な森であるかということと、住民の身近に在って、普段気兼ねなくその森に接する事が出来るか、それが問題だという事でした。私は、やはり身近にある森、住宅の中に残されている森、これを出来る限り在りのままの姿で残していく事が、私たちに課せられた課題ではないかと考えます。



活動日は、新年度も従来通り第一と第三の土曜日と決めています。写真にある様にやっと居心地の良い丸太のベンチも出来、お隣のグループホーム“ひなたぼっこ”の名前の通り、活動日には活動の後の昼食を日向ボッコしながら癒されています。是非、遊びに来て下さい。会員一同大歓迎いたします。

ボランティア活動を始めるに当たって一番の悩みは道具の無い事でした。鋸、鉈、ナイフ等を個人で購入しました。個人で持つ必要の無い大きい道具について、当座は借りて対応しましたが、去年の暮れにたまたま紹介を受けた花王の緑化基金と松戸市の協働事業提案制度に応募したところ、その両方共に採用され、四月からの活動に大変な弾みをつけられる事になりました。これまでの先輩方の活動が認められたものと思い感謝するところです。二年目を迎えて、ホダシの活動を近隣の住民に少しでも理解して頂ける様な企画をしたいと思います。皆様の暖かいご助力をお願い致します。

里やまボランテイア入門講座

五期生いよいよスタート

里やまＶ・千駄堀　大石愛祐

昨年１２月に受講修了した私達、五期生（２１名）が　昨年１２月、本年２月、３月と３回の交流会を重ねた結果、会の運営も軌道に乗り　このたび　会の名称、定例活動日等も次ぎの通り定まり４月より具体的に活動開始出来る体制になりました。活動の拠点となるフィールドにつきましては早期確定に向けて関係の方々に現在ご尽力していただいており、感謝しております。

１　会の名称：里やまＶ（ファイブと読む）・千駄堀
２　定例活動日（予定）：毎月第２、第４火曜日
　　１０時から
３　活動開始：４月より
４　会員数：１９名（２月末現在）

就きましては　今後とも　里やまボランテイアの諸先輩並びに関係の方々のご指導、ご協力をあおぎながら一歩一歩前進、成長していきたいと思っておりますので何卒よろしくお願い致します。以上

一枚の掲示板に絶大な効果あり！

川上将夫

千駄堀樹林地区では毎年定期的に、「千駄堀＊森の小径観察＆クリーンナップ」のタイトルで観察会とゴミの収集活動を行っています。

いつもお世話になっている森に少しでも感謝をということで、ゴミ収集を含む学習会を 2005 年の秋よりはじめました。収集した後はとてもきれいになり、私たちもすがすがしい気持ちで現場を後にします。

ところが私はいつもその後が気になり、１週間後、

1ヵ月後、2ヶ月後と定期的に見回るようにしています。初めてごみ収集を行った時は、なんと翌週にもう粗大ごみが捨てられたことがあり、憤懣やる方なしの気持ちで一杯に。誰かが捨てるとゴミがゴミを呼ぶで、だんだん手がつけられなくなります。

昨年 2007 年 11 月に千駄堀樹林地区で、また張り切って観察会とゴミの収集活動を行いました。

さてその時も収集の後にまた粗大ゴミではかないません。一計を案じ、活動の宣伝も兼ねて小さな掲示板（それは粗末なものですが）を一枚、杉の木にくくりつけました。中身は簡単に「クリーンナップを行ったことや緑ネットの活動の紹介」でした。また同じ内容ではだんだん効果も薄れると考え、正月には「あけましておめでとうございます」の文を、2 月には「アオキとイシダモが仲良く並んで生きている写真」を掲載したりして、定期的に内容を更新し、近隣の皆さんの関心を引くように工夫をしました。

さてその効果のほどは？

驚くべきことにゴミ集から 4 ヶ月後の今でも、多少のゴミが散見される程度で、以前と比べると驚くほどきれいな状態が保たれています。

ゴミを廃棄する人に対し、この掲示板がどの程度効果があったのかは定かではありません。ひょっとして近くを散歩される方の誰かが、自主的にゴミ集めをはじめてくれたのかもしれません。もしそうだとすればそれは仲間が増えた訳で、とてもうれしいことです。

どちらにしろ、掲示板を始めたら森が驚くほどきれいになったのは事実ですから、大きな効果があったといえます。

微々たる活動ですが、「継続こそ力なり」を信じて、これからもいろいろ工夫をしながらこの掲示板を続けていきます。

～しぜんのコラム②～

ヨコヅナサシガメに要注意

太いサクラの幹に、見慣れない昆虫が集団越冬している。ヨコヅナサシガメという帰化昆虫で、最近になって急激に分布を広げてきたから、まだ掲載している図鑑も少ない。カメムシの仲間で、他の昆虫等の体液を吸い、成虫のからだの横に綱のような模様があるから「横綱刺しガメ」である。

ヨコヅナサシガメは強さも横綱級。昆虫だけでなく、ダンゴムシなども襲うし、餌が足りないと共食いもする（横綱対決？）。どれだけの在来昆虫が、この帰化昆虫の餌食になったことか、陸上のアメリカザリガニ的存在である。人も刺すから要注意。今後の分布拡大にも要注意である。　（山田 純稔）

終齢幼虫の集団越冬…5月の連休頃に羽化するので、サクラ並木を要チェック。羽化直後は全身が赤く、美しいというより妖しい。

緑のネットワーク情報

「関さんの森」で野草の天ぷらとタケノコ堀り

4月の関さんの森の恒例行事は、野草の天ぷらとタケノコ堀り。この行事は、千葉県などが主催する第5回里山フェスティバル『里山シンポジウム』の都市緑地分科会として位置づけて実施することにしました。

道路問題にゆれる『関さんの森』の現状や、そこに育まれる生き物たちを観察。さらに、森の恵みを味わいながら、都市に残された緑地について、考えたいと思います。ふるってご参加ください。

行事名…第5回里山フェスティバル『里山シンポジウム』都市緑地分科会
テーマ…貴重な自然体験の場「関さんの森」を残そう！
日　時…4月20日（日）10～13時
場　所…関さんの森・溜ノ上の森
内　容…関さんの森ウォッチング（森の観察会・周辺の開発状況見学），タケノコ堀り体験，タケノコ料理・野草の天ぷら試食
参　加…事前連絡不要。直接『関さんの森』においでください。参加費無料。雨天時はできる範囲で実施します。なお、飲み物と主食（おにぎり程度）はご持参ください。

—4 月総会のお知らせ—

4 月 12 日（土）17：00～テント小屋にて総会です。今年の活動などについて意見交換もいたしましょう。

—5 月観察学習会のお知らせ—

「新緑の矢切斜面林」

江戸川を渡ると真っ先に飛び込む緑の帯。市川市の国府台緑地、松戸市の栗山特別緑地保全地区に指定された斜面林の新緑を楽しみながら歩きます。

5 月 11 日（日）9：30 北総線矢切駅前集合
弁当、雨具等

緑ネット通信

No.21

緑のネットワーク・まつど
代表：川上将夫　　年会費：1000 円
連絡先：高橋盛男 047-367-2857
渋谷孝子 04-7153-5392

5月11日 観察学習会⑳
「国府台緑地から 栗山・矢切の斜面林へ」

報告:藤田 隆

この日、朝から雨、昼ごろには雨も上がると報じる天気予報に促されるように、玄関先から傘を開いて出かけた。集合場所の矢切駅には２５人が集まっていた。国府台緑地に入るまで市川松戸線を歩く。この県道は主要幹線道路で車が数珠繋ぎに走り、上り坂ではエンジンを一気にふかし上っていく。車の排気ガスのせいか、道路沿いの緑が時折かすんで見えた。

国府台緑地には手作りの看板がかかっていた。国府台を良く知るメンバーから、市川市が緑の保全のため数年前に数十億円程度で買い上げたらしいこと。緑地５ヘクタールは市の管理下にあり、保全活動は、市川市が主催した緑と花の市民大学に応募し、昨年一年間の学習と実習を終えた第２期修了生３０名が行う予定であること。松戸市では、昨年１１月に「里やまボランティア講座」の第５期が終了し、ボランティア講座の修了生は合わせて１００人を超え、第１期から第５期のそれぞれのメンバーがフィールドを探し、緑の保全活動に取り組んでいる。市川市でも、森の保全活動ボランティアを育てる講座の第三期の講座が始まる。などの説明があった。

樹林地保全の活動が松戸、市川の東葛地域でピンポイントであっても行われ、互いの連携を取り始めると市域を超えた交流が始まるのではないかとひそかに思うのであった。

国府台緑地は新しい木の杭とロープで遊歩道が区切られ、すでに一次的な作業に取り掛かったようだった。中に入ると、うっそうとしていて奥が見えない。右手には大きなキリ、雨につられて薄いピンク色の花が地表に落ち、下草の間にハンカチを広げたように見える。奥にはハリエンジュ（ニセアカシア）が開花し、甘い香りが漂う。「こっちの森は甘いよっ！」といざなっている。間伐が待ち遠しい暗い林床にはムラサキケマンやフタリシズカなどが生え、シュロやアオキが茂っている。「植物は自らの性格に合わせて生えている。」という説明が耳に入ってくる。

栗山緑地をバックにパチリ

国府台緑地の斜面を降りきると、市川、松戸の市境である。しばらく進むと、かつて湧水でねぎ、野菜を洗っていたという通称「ネギ井戸」に通りかかる。農作業を終えた人と野菜類を洗う人たちでにぎわった往時を偲びながら、井戸を覆っている屋根が半分朽ちかけている現実を目にすると、その変わりように時代を感じるのであった。

本久寺の境内から栗山浄水場へ上がる。指定を受けた栗山特別緑地保全地区の南端である。切り立った急峻な崖にコナラ、イヌシデ、エノキなどが生えている。宅地分譲が進み、斜面林の際まで住宅が並んでいる。斜面林には上から落としたのであろうかゴミが散乱し、あまりにも急峻なため収集を拒む状態になっている。なかには数年前から放置されている冷蔵庫の粗大ゴミもある。

途中、「大井戸の跡」を示す標柱を見つける。湧水は枯渇したと記されている。台地上に降り注いだ雨が地下水路を作り、付近の畑、住民を潤す井戸があったことが分かる。住宅が立ち並ぶ台地上には雨水が浸み込まず、下水道を通って川へ流れ込んでいる。近年、局地的に襲う大雨で日本各地で土砂崩れや鉄砲水が起き、被害をもたらしている。その原因は森林を伐採しダム効果が失われたためと聞いているが、この地ではどうなのだろうか。もはや台地上の森の復権はかなわぬことなのかもしれない。

野菊の墓文学碑に向かって道は上り坂にかかる。時折、対岸の葛飾区柴又あたりが見え隠れする。上りきった野菊苑からの展望は矢切のねぎ、キャベツなどの収穫期を迎えた畑が点在する田園風景が広がり、江戸川の堤防をはさんで、ビル群が立ち並ぶ都会の風景を対照的に見ることができる。常磐線で江戸川を渡るとき目に飛び込む斜面林は松戸を象徴する光景である。

真新しい「野菊の里浄水場」を横目に見ながら、足を運んでいると「お友達に『斜面林の緑の向こうには何があるの。』と聞かれて、『住宅が斜面林の間際まで来ているといえなくて』答えに窮した」というエピソードが聞こえてきた。

斜面林は外郭環状道路で一端断ち切れている。私たちは神明神社からサポートセンターへ急勾配を上がった。

昼食後、サポートセンターで観察会の感想を聞いたところ、「人が入れない斜面林をどう保全するのか」、「二年前からある粗大ゴミがそのままだ。どう手を入れるのか」、「急斜面の竹は崩れる危険性が高い」、「斜面林の上の台地の開発が進んでいる。何とか手を打たないと」、「斜面林の緑地保全のため、遊歩道を設置して市民が関心を寄せるような工夫があると良い」と特別緑地保全地区に指定された斜面林の継続した保全活動に意見が集中した。

これを受けて、松戸市みどりと花の課の島村専門監は、「開発が進む斜面林保全のため昭和６３年から測量をはじめたが、地権者の了解を得られなかった。都市緑地法による今回の指定は、建築や伐採が制限され、相続税が発生した場合に、市と管理協定を結ぶことによって８４％の評価減となり優遇措置を受けられる。残りの下矢切、中矢切、上矢切地区３ヘクタールの指定も進めていく。」と述べ、松戸は「緑の基本計画」で、矢切地区は川のレクリエーション交流拠点として、農地、江戸川、坂川、斜面林がセットになって人と人が交流できるエリアとして計画が進んでいることを説明した。

市川市の国府台緑地は、ボランティアが入り、緑の保全活動と整備が始まる。松戸市は特別緑地保全地区の指定を受けた栗山の斜面林が観察できた。下矢切、中矢切、上矢切の斜面林約３ヘクタールの指定はこれからである。松戸の緑を守る運動や市民の声は行政にも届くようにしていきたいものだ。と感じた観察会であった。

永遠に残る　栗山地区の斜面林

「緑地保全で感じること」

松戸市　みどりと花の課　島村宏之

.今回の観察会には、みどりと花の課から３名、参加しました。特別緑地保全地区指定が成し遂げられた喜びを市民の皆さんとともに分かち合うために担当全員で参加しました。

矢切の斜面林は松戸市を代表する緑地だからこそ、しっかりした法規制で確実に守りたいとの思いから、昭和６３年に測量を開始し、環境調査、山林所有者との話し合い、県との協議などを行い、指定に向けた準備を続けてきました。その間、すべてが順調にいったわけではなく、停滞していた時期もありました。しかし、行政の緑担当課として、松戸市の緑の表玄関を何としても守りたいとの強い気持ちで機が熟するのを待ち続けました。緑地保全の仕事は本当に息の長い仕事です。

今回の栗山地区の２ｈａの指定に向けて、山林所有者１３名と２法人を廻り、説明してきました。山林所有者の中には、４００年前の徳川２代将軍の時代から斜面樹林を守ってきた方もいらっしゃいます。田畑と交換してまでも、斜面樹林を増やし、大切に維持管理してきたが、相続税が高くて持ちこたえられそうにないという話を聞き、山林所有者が先祖代々、守り育ててきた強い意志と危機感を受け止め、改めて、指定に向けてのエネルギーが沸いてきました。

もう一つ忘れてならないのは、この矢切の斜面林の重要性に気づいてくれる市民の存在です。緑ネットの矢切観察会は今回で３回目になりますし、市民との協

働で実施されている里やまボランティア入門講座では５年続けて講座の中で矢切斜面林の観察とグループワークが開かれ、矢切を保全する必要性とその課題について意見交換が行われ、矢切への市民の関心・理解が深まってきています。

今回、指定できたのも、こうした山林所有者の理解と市民の支えがあってこそと思います。

今回の栗山地区の特別緑地保全地区指定の反響は予想以上に大きく、記者発表後に日刊紙５社、ミニコミ紙１社、市広報に掲載されました。その後の市内外から寄せられたものを紹介します。通常、市民相談室には市民から様々な行政に対する苦情が来ますが、今回は矢切の指定への賛辞が寄せられました。「指定されたことは大変いいことである。東京から車で帰ってくると、斜面林を見るとほっとする。今後もかんばって推進してほしい。」白井市議会議員からは「東京から電車で帰って来る時に、矢切の斜面林をよく見ていたので、気にしていました。指定されてよかったですね。」このように市外の方からも喜んでいただけると、日頃、松戸市民の共有財産だと話しているのをこれからは千葉県民の共有財産と言い直さなければなりませんね。

平成１４年６月に出された第１期緑推進委員会提言の中で、「市内に点在する斜面林や平地林は環境が激変した現在では、所有者のみの努力と負担により保全されているのが実情である。これを行政・市民・企業の３者が協働して保全するしくみに転換し、早急に新たな対策を講じる必要がある。」と問題提起され、その後、対応策の一つとして、里やまボランティア入門講座が開かれ、山林所有者をサポートする里やまボランティア団体が増え、保全活動が活発になってきました。今後は、みどりに関わる市民・山林所有者・企業・大学・松戸市などの力を結集し、みどりの課題を解決していけるような状況を作っていきたいと思います。

㈹就任に当たって

川上将夫

皆さんこんにちは。このたび緑のネットワーク・まつどの代表をつとめさせていただくことになりました川上将夫です。どうぞよろしくお願いいたします。

現在松戸市内に残された樹林面積は市全体の３％以下といわれており、これからも更にその減少が心配されています。減少の一途をたどる理由には、相続税、維持管理、近隣住民とのトラブルなどいろいろあります。

また一方、少しでも樹林の減少を食い止めようと、市民レベルで緑の保全グループが活動を行っており、新しいグループも誕生しています。

２年前の２００６年５月、世界的な環境学者レスター・ブラウン博士が、関さんの森（松戸市幸谷）を訪れました。そのとき博士は、「森は人々に計り知れない恵みを与えてくれる。人間らしい快適な生活を送るため都市部の森は重要な社会資本です」といわれました。森の中で嬉々として遊ぶ回る子どもたち、こんこんと水が湧く池で動植物の観察を行う小中学生、生き物たちに触れながら命の大切さを学ぶ看護学校生、四季を通じ森で散歩を楽しむ人々、森の冷気による夏場の気温上昇の抑制など。この様にいま市内に残されたわずかな樹林は、日々私たちにはっきりとした形で多くの恵みを与えてくれます。すべてが私たちにとって大切な社会資本なのです。

この樹林を後世に残すためには、市民グループ間の協力・連携はもちろん、行政・地権者との協力・連携も不可欠です。たとえば地権者が樹林を後世に残したいと願っても、現行制度では相続の際に膨大な相続税がかかり、残念ながらあきらめざるを得ません。現行制度を変えるためには、地権者からだけではなく、行政・市民からも国に対し広範な働きかけが求められると思います。ひとつのグループや関係者だけでは解決が困難な課題も、グループ間・関係者間で知恵を出し協力・連携すれば、よりよい方向で解決する可能性がでてきます。

緑のネットワーク・まつどは、市民グループ間の協力・連携はもとより、市民・行政・地権者間の協力・連携も進める役割を担いながら、具体的な成果につなげたいと考えています。

息の長い活動ですが「継続こそ力」を信じて、これからも活動を続けてまいります。

皆さんのご協力をよろしくお願いいたします。

総会報告

4 月 12 日 2008 年度総会が開催され、添付･同封資料のように報告、検討され、承認されました。

緑のネットワーク情報

第 15 回江戸川流域シンポジウム
「川の環境をどう守るか」

日時：7 月 26 日（土）12:30 会場　13：00～
場所：女性センター　ゆうまつど　(駐車場なし)
資料代：300 円
講演「環境と治水　川づくりの目指すもの(仮)」
竹村公太郎さん
(財)リバーフロント整備センター理事長
パネルディスカッションには当会の高橋盛男さんも
＊終了後、懇親会の予定

第 5 回手賀沼学会大会

日時：　2008 年 7 月 5 日(土)13 時～16 時
場所：　中央学院大学 30 周年記念館 611 教室
基調講演：　「緑地を保全する試みの意義」
田村順孝氏（千葉大学大学院園芸学部教授）
パネラーとして当会の高橋盛男さんも参加
◎基調講演の中で、１年でも長く、１本でも多くの樹木を増やし、田畑などの生産緑地を残していく方策について提言していただきます。

千葉大学園芸学部の松戸存続に関する署名のお願い

川上将夫

現在千葉大学が園芸学部の西千葉本部への移転を検討しております。
千葉大学園芸学部は市内有数の緑地です。移転の場合敷地は売却される可能性が大きく、開発により緑地ばかりではなく、洋式庭園など文化・歴史遺産も損なわれるのではないかと懸念されます。
このため 6 月 9 日に園芸学部の松戸存続を求める「市民の会」が設立されました。緑のネットワーク・まつどは同会の趣旨に賛同いたします。
つきましては、「市民の会」より署名のお願いがきておりますので、皆様のご協力をお願いいたします。詳細は同封の資料をご参照ください。

おわび：通信 20 号の特集「四季の会」の本文中、ホダシの森の面積が 2.65km² となっていましたが、2,650 ㎡の間違いでした。訂正いたします。

～しぜんのコラム③～

妖しいＫＧＢ

梅雨どき、暖かい雨が降る夜から朝にかけて、林や公園脇の道路で、妖しい生き物に出会うことがある。その筋の人たちが“ＫＧＢ”と呼ぶコウガイビル“Kou-Gai-Biru”のなかまだ。頭部が笄（昔の女性の髪飾り）に似て、ヒルに似ているからこの名がついた。ただし、「ヒル」と言えども、ふつうのヒル（環形動物）にあらず、コウガイビルは扁形動物のなかま。このグループには、再生力の強いプラナリアや寄生虫のサナダムシがいる。
コウガイビルには数種あり、真っ黒のクロイロコウガイビルは 10cm 程度。鮮やかな黄色のオオミスジコウガイビルにいたっては、1 m近いこともある。こんな生き物が、夜間～早朝にかけて路上を這っているのだから、気味が悪い。ときに、住民を驚かせて話題になることもある。
このオオミスジコウガイビルは外来生物で、ミミズやカタツムリが好物。日本の生態系にも少なからず影響を与えているに違いない。　（山田 純稔）

オオミスジコウガイビルは、黄色地に3本の筋。そしてなによりも長い。

観察学習会 22
「千葉大園芸学部界隈　樹木ウォッチング」

戸定が丘から移転問題でゆれる園芸学部構内へじっくり樹木ウォッチング。浅間神社の極相林まで、“市民の宝”とも言える街中の貴重な緑を観察しながら歩きます。午後は室内で学習会も。
7 月 13 日(日) 9：30～14：00
（13：00～室内で学習会）　小雨決行
集合　JR 常磐線松戸駅東口デッキ　9：30 集合
持ち物　弁当、飲み物、雨具
お問い合わせ　047-343-6022　田中

緑ネット通信 No.22

緑のネットワーク・まつど
代表：川上将夫　　年会費：1000 円
連絡先：高橋盛男 047-367-2857
渋谷孝子 04-7153-5392

7月13日 観察学習会21
「千葉大園芸学部界隈 樹木ウォッチング」

報告: 山室功　＆　藤田隆

千葉大学園芸学部松戸キャンパスを中心に戸定邸、浅間神社の樹林地を巡る観察学習会が平成 20 年 7 月 13 日に催された。

創立百周年記念行事を一年後に控える千葉大学園芸学部は明治 42 年（1909）創立以来、地域に根ざした歴史と伝統あるキャンパスである。又、学部の性格上非常に多くの樹林・緑地に囲まれ緑豊かな場所として多くの市民から親しまれ誇りとされる存在である。

大正時代には歌人・与謝野晶子が訪れ「松戸の丘」「ある日」と題し短歌 60 首を詠んだ文学的な場所でもあり歌碑建立も近々に予定されている。

そんな折り千葉大学園芸学部の西千葉移転問題が浮上、近隣内外の市民によりこのキャンパスへの関心がより一層高まりつつある事も相まって、連日の茹だるような暑さにも関わらず非常に多くの参加者がこの催しの為松戸駅東口に集合した。

取材の為、地域のテレビ局コアラテレビも同行した。

参加者多数の為、三つのグループに分け最初の目的

地である戸定邸に向かった。この戸定邸は水戸藩最後（11 代）の藩主、徳川昭武公が松戸に作った別邸であり、市民の憩いの場所となっている。戸定邸駐車場において付近の景観を眺め、台地に入り組んだ谷津形状の地形から相模台と戸定ヶ丘の地理的な関係を知る。

階段を登り大きなイチョウのある山門をくぐり戸定邸に入る。ヤマモモの大木、戸定邸玄関を超え緩やかな曲線アプローチ道を歩く。その先に幹廻り 5 メートルを超えるクスノキの巨木が何本も聳え庭園を控えている。

この庭園にてダイオウショウの葉の構造、クマノミズキとミズキの比較観察を行った。

その後戸定邸を一旦出て西側斜面林を林縁に沿って歩き、次なる目的地千葉大学園芸学部に向かった。旧正門から園芸学部の森に一歩踏み込むと自然の冷涼感が心地よい。少なくとも気温が二三度は下がったのではないだろうか？

つい先日洞爺湖サミットにおいて温暖化防止、CO2 削減が議題にあがったが、我々庶民レベルでも分かりやすく身近に温暖化問題を考える場所がここにあった。

樹林がこれほどまでに気温に影響する事を肌で実感出来る事は大きい。

やはり樹林地は我々にとって（勿論生態系にとっても）無くてはならない存在なのだ。

旧正門左手に落葉樹を中心にした明るい林がある。ここ

にはミズキの巨樹、カツラなどがあり、オカメザサが林床に広がる。キャンパスに向かうゆるやかな坂道を登り、途中たくさんのクスノキの巨木が林立する辻を右に折れるとイギリス式風景庭園がある。洋風の瀟洒な建物（洗心館）とたくさんの実（まだ青い）をつけているヤマボウシの木が印象的。

この庭園はフランス庭園Ａ館からの眺めを配慮し、イギリス式風景庭園及び南に広がる東京の街と富士山の景色を眺める為、地盤を数メートル低くデザインされた。ただ現在は周囲の樹木が大きく育ち、当初の設計とは違った風景になっている。

黒ボクを積んだロックガーデンは富士塚を彷彿とさせるが、その途中でイタリア式庭園に入る。雌雄二株のイチョウがゲートの如く並ぶ。幾何学模様で出来たイタリア庭園には園芸学部式混垣（まぜがき）と言われる 80 種類もの植物を混成させた垣根を観察する。

生協付近にあるシダレカツラの観察の後、フランス式庭園に向かった。途中ユリノキ並木、トゲナシニセアカシヤとエンジュ並木を経過ヒマラヤスギの巨木を観察した後、次の目的地である浅間神社に向かった。

（以上　山室　功）

浅間神社は富士山の山開きである毎年7月１日が祭礼の日。かつては祭礼の日に近郷から富士講の信者が集まったとされる。松戸市内では根本の金山神社、竹ケ花の雷電神社に富士塚がある。

浅間神社は極相林に覆われ昭和41年に県の天然記念物に指定された。うっそうと茂った鎮守の森は園芸学部や戸定邸を擁する斜面林から切りはなされ、取り残されたように横たわっている。市教育委員会の説明書によると太白河（ふとひがわ＝今の江戸川）の開析作用で三矢小台と分離したという説があるようだ。山頂部まで高さ20メートルを上がるとヤブニッケイがある。これが高木の第一層、第二層（中木）、第三層（低木）にはタブノキ、ツバキ、ムクノキ、モミジほか200種類以上が育ち、独自の植物相が見られる。これも周辺から分離した環境のためなのだろう。林に入ると急に気温が下がり、樹木の蒸散作用で日に照らされ、火照った私たちの体を癒してくれる。文字やことばのない時代に森から出てきた私たちの祖先がそうであったように、ひとたび森に入ると元気をもらえるのだ。

12時を過ぎたところで浅間神社をあとにし、矢切のサポートセンターへ向かった。

【学習会】

午後に入り、サポートセンターの会議室で学習会が行われた。30名定員の会議室いっぱいの参加者が熱心に園芸学部の印象を語った。

「園芸学部にはじめて入った。明治時代に作られたことに驚いた。」

「園芸学部に緑がいっぱいあって良かった。」

「園芸学部、戸定邸には何度も訪れている。移転の話を聞いてもっと大事にしていかなければならないと思う。」

「今回の説明を聞いて、もっと広く知られるように情報を公開してはどうだろうか。」

「園芸学部の近所のマンションに20年住んでいる。松戸生涯学習大学で緑のことをテーマに研究することになった。園芸学部の移転の話、松戸緑の基本計画などを手がかりに研究したい。」

園芸学部の移転について、高橋副代表から経緯の説明が始まった。6月いっぱいには園芸学部の教授会で方向性を出すということだったが、結論を出すには至らなかったようだ。園芸学部が西千葉地区に移転した場合の試算表を作成。提出を待って9月には千葉大学本部に返事をすることになっている。

移転問題について出た意見・コメント

＊ 今回の移転計画は簡単にはとめられないと思う。署名活動は進めるとして、もし移転が決定された場合、移転後の姿についてよく検討することが必要ではないか？

＊ 要望案や署名提出は7月で大体終わる。第2弾としては、園芸学部や千葉大に対し、直接接点がある

人に対し（教授会メンバーなど）、個別にアプローチするのが有効と思われる。

（以上　藤田　隆）

緑関連グループ交流会　報告

藤田隆　＆　野口功

日時　9月13日（土）17:00～19:00
場所　松戸市まちづくり交流室テント小屋

意見交換会に集まったのは、一起の会、囲いやま森の会、三樹の会、四季の会（以上は松戸市が開催した「里やまボランティア入門講座」の各年度の修了生が中心となって活動する森のグループ）、根っ子の会（根木内歴史公園の森のグループ）、わんぱくの森の会（市川市）、関さんの森を育む会、金ケ作の森を育む会、八幡腰の森の会の9グループに「緑のネットワーク・松戸」の事務局を含めた11名。

各グループの活動は森の特長を生かした活動を展開している。例えば、ゴミ拾い、枝打ち、下草刈り、植栽、炭焼き、クラフト、保育園、小学校の観察会、レッツ体験（ボランティア体験の受け入れ）など盛り沢山だが、活動を広げる際の資金に頭を悩ませているのが現状。チェーンソーや物品倉庫を調達するにも、会員からの会費徴収では限界もあるため、頼みとなるのは千葉県や松戸市、市川市、企業の助成金だ。グループ間で情報交換が行われた。

近隣の市民を引きつけ、森への関心を高めるためには自然観察会、クラフト教室も欠かせないとグループで工夫を凝らしイベントを開催し、小学生、父母が参加している。森の定期的な活動を理解してもらうための掲示板の設置も効を奏したのか、市内のゴミ拾い活動では近隣市民と連携したほか、森の活動日には市民からの声掛けや市民の参加も見られるようになった。

森の活動につきものの立ち木の伐採、処理は、人材や処理能力にグループ内の限界を超えることもあり、緑ネットのメーリングリストを活用した人事交流などの連携が解決方法のひとつになるのではないかと意見もあった。今後の検討課題でもある。

（以上　藤田　隆）

●松戸里やま応援団が「一起の会」と名称を変更。「松戸里やま応援団」の名称は、里やまボランティア講座修了生を中心としてできたボランティア団体の共通の名称として使われるようにになった。

●八幡腰の森の会の特徴

・個別グループがそれぞれフィールドで活動しているこれまでのやり方と違って、里やま応援団グループの各団体が団体会員となり、全体で支えるという新しいスタイル。

・松戸で初めて所有者との協定が結ばれ、県の里山条例に基づく里山活動団体の認定申請準備が進められている。

●活動資金について。囲いやまに続いて四季の会が花王の助成を受けている他、松戸市の協働事業の助成（根っ子の会）、松戸市の市民活動助成事業（四季の会）、市川市の１パーセント助成（わんぱくの森の会）など。しかし、企画事業への助成の場合、イベントなどに追われ、また一定割合補助のために、かえって自己負担が増えるなどの問題点があることも紹介された。

（以上　野口　功）

－－－

上記の経緯から松戸市が強制収用を撤回し、緑をなるべく大きく残し、歴史遺産を大切にした道路に変えるよう、署名運動を行うことといたしました。

目標は 50,000 人。達成するのは並大抵ではありませんが、どうか同封の資料をお読みいただき、ぜひ署名運動へのご協力をお願いします。

資料として、署名簿のほか「署名運動ガイドブック」を同封いたしました。このガイドブックは、署名に際して想定される質問にわかりやすく答えるため、作成したものです。どうぞご利用ください。

なお「関さんの森」は、土曜日・日曜日・祝日についてはスタッフが案内する体制をとっております。（10時―15時。大雨の場合は中止）
皆様のご訪問を心よりお待ちいたします。

- ✧ 署名の締め切り:一次締め切り 10 月 15 日。 最終締め切り 11 月 15 日。
- ✧ 署名は、松戸市内・市外を問わず、大人でも子どもでも、どなたでもできます。
- ✧ 署名は自署、代筆どちらでも結構です。
- ✧ 複数名記入で、住所が同じ場合、「〃」ではなく、正しく書いていただければ幸いです。
- ✧ 署名いただいた原本を下記までお送りください。（郵送、または Fax）

送付先:関さんの森エコミュージアム

〒270-0017 千葉県松戸市幸谷 131

電話 090-9365-9608（武笠）

Fax 047-343-7694 （小堀）

関さんの森ホームページ
http://homepage3.nifty.com/matsudo/seki/seki.top.htm

～しぜんのコラム④～

風情のない“アオマツムシ”

秋の夜長は、虫の声を楽しみたい。

たとえば、文部省唱歌「虫の声」に出てくるのは、マツムシ、スズムシ、キリギリス、クツワムシ、ウマオイの５種。

これら虫の声は、その多くは足元から聞こえるもの。しかし、街路樹や庭木の上の方から、やたらに大きな声で「リーリーリー…」と鳴く虫がいる。それは間違いなくアオマツムシである。

アオマツムシは、明治時代に中国から帰化したとの説が一般的。1970 年代以降、都市部の街路樹や公園などで急に増えてきた。

さて、皆さんの家で文部省唱歌の「虫の声」は聞こえますか。松戸市幸谷の関さん宅では、クツワムシとウマオイの 2 種がいるとのこと。さすがである。ただし、アオマツムシの声が大きすぎ。クツワムシの姿は見かけるが、声は聞いていないそうだ。

（山田 純稔）

アオマツムシは木の上にいるから、緑の保護色。日本在来のマツムシやコオロギ類は、地面にいるから、茶色の保護色である。

観察学習会 23　「緑の回廊を歩く～八ヶ崎から幸谷～」

バス停水砂から幸谷まで、斜面林の緑を観察しながら歩きます。寺社の見所も。
午後は関さんの森で学習会。

10 月 12 日（日）　9：30～14：00　参加費 300 円（会員 100 円）

集合　JR 馬橋駅　改札口　**小雨決行**

持ち物　弁当、飲み物、雨具

お問い合わせ　04－7153―5392　渋谷

定例会のお知らせ　11 月 8 日（土）、12 月 13 日（土）17 時～19 時
市役所前のテント小屋にて定例会を行います。どうぞご参加ください。